

脳に孔四つ

中島八十一

令和四年臘月余の脳に四つの孔開きたり。敗血症にて脳内出血、脳梗塞、蜘蛛膜下出血一時に生じたればかくの如き結末を得たり。三冠王三度の落合博満をして顔色なからしむるほどの出来事なり。入院先の醫局長病室をノートPCを小脇に抱へ訪ね來りて自らの脳畫像見むと欲すやと問ふ。さらでだに心地悪しきもの如何ぞ見るに値せんと答ふるにパチンと音立ててPC閉ぢそのままその男退出す。爾來余は一度たりとも自らの脳畫像を見ること無きまま今日に至る。四つの孔とは別の機會に他の醫師より聞きたるに、抑々脳のいづくに孔ありて如何なる形狀をしたるか、皆目見當もつかざりき。

十八世紀ウィーンに現れたる骨相學の大家ガルの指摘に始まりし脳機能局在論は圖らずも三百年を経たる後に極東の一國において猫も杓子も脳のどこそこはかく働きをもつと會話に混ぢる奇怪とより言ひやうなき風潮を産みたり。かかることは如何にもよきことにあらずや。余の脳に孔開きたるも箸使ひに障りなく、歩行にも難儀するなし。何より孔開きたる前後で余は余としてその連續性失ふことなし。

脳のここは言の葉を發するに、ここ損へば言の葉を發すること不能となる。片やここは物を見るに、ここ損へば物見るを得ず。腦出血にてあれ腦腫瘍にてあれ、ここ損へばかかる症状出づと醫療に従事せんとする者の初期教育にては教ふ。過ちならず。

されば脳のいづくに「私」の居るや、脳のいづくを損なへば「私」の消ゆや。余の四つの孔いづれも「私」避けたれば「私」は「私」のまま續きたらん。發病以來我が妻は余莫迦になりたりといふ。特段に反論はすまじ。余にとりて敵を論破せむよりはむしろ三度の飯滞りなく食ふを得むこそ肝要とは辨へたり。とまれここにては莫迦になるは得策なり。然る所、發病時四日ばかりの意識缺如期間を除けば余は同じやうに余を續け居る。實はその四日間においても余は閻魔大王の面接受けむがために地獄に赴きたるに余は余にして變ずることなし（冥府訪問記参照）。しからば「私」は脳のいづくに居續くや。

ドイツ人コルンヒューベルの發見に基づく脳の運動準備電位 Bereitschaftspotential なる電氣的活動は脳機能の客觀的表現として一世風靡したる觀持ちたるも、發見者の意圖はさにあらずして意圖を持つ自我の追及にありたり。ニューロン及びニューロンの接續するシナプスの研究にてノーベル醫學生理學賞の榮譽に輝きたる豪洲人エクルス卿においてなほ

心の身體としての脳に存するにはあらずして、げに神に據ると言ひけり。いづれも20世紀後半のことなり。西歐にデカルトの心身二元論あり、東アジアに魂魄あり。余は脳に四つの孔開くとも余は余にして變ることなし。しからば余の心臓の手術中、心時間半もの間麻酔かけ心臓止めたればこの間余は余にてあらず。畢竟眞の余はいづくにありしや。

父も母もすでに逝きて久し。余の周圍にその魂居るやうには見えざるも、兩人のあの世にて再會し居る事實を余知る。いかんが疑義を抱きて我が平穩に波風を立つるの要あらむ。余身罷りたる曉にはあの世にて一族の者前にして平身低頭這ひつくばるは御免蒙りたしと思ふばかりなり。

（令和七年二月十日受附）